

# 欧米の美術館における鑑賞教育について

—米，英，仏の美術館の調査から—

## Appreciation Education of European and American Art Museums -From the Research of Museums in United States, Britain and France -

小池 研二

KOIKE Kenji

### 1. はじめに

#### 調査研究の目的

現在我が国でも美術館と学校との連携による鑑賞教育が多くの地域で行われ成果も多数発表されている。アメリカ・アレナスや上野行一らが紹介した対話による鑑賞もかなり知られるようになった。当初は、会話をすることで鑑賞教育ができるのだろうか、といった疑問も現場にはあったが、今日では作品を前に子どもたちが作品から受けた印象や自分の考えを話し合いながらより深い鑑賞につなげていく活動は、美術館及び学校関係者双方の努力により浸透を見せている。しかし、一方でこれらの鑑賞活動は一部の学校や美術館のみで行われているのも確かであり、全国的に広がっているとは決していえない現状もある。その原因は、学校の近くに美術館が存在しない、授業中に美術館を訪問するためにはカリキュラム編成から考えなければならない、校外での児童生徒の安全確保などの物理的な要因が大きい一方で、学校側、美術館側双方の理解不足が未だに大きいことも考えられる。筆者は現場の教員として美術教育に携わってきたため、学校サイドから連携を見てきた。そして、何度か美術館との連携授業を実施してみて美術館を活用した鑑賞教育の効果の大きさを実感した。そこで言えることは、まず現場の教師が美術館について多少なりとも興味を持ち積極的にかかわっていく姿勢を示すことである。このような姿勢は美術館側にとっても言えることであろう。

美術館での鑑賞教育について、美術館と学校との連携について双方が少しでも理解し、歩み合っていくことがこれまで以上に重要になると今までの活動から実感した。そのためにも双方の視点を持った調査が必要である。美術館で行われているアウトリーチプログラムを含めた鑑賞教育においても美術館関係者からの研究だけでなく、教員や教員経験者の目から見た研究も必要であろう。更に我が国の美術館教育に影響を与えた海外の美術館の活動をも調査研究する必要がある。本論は欧米4つの美術館の教育担当者からのインタビューを中心にを行った調査に考察を加えるものである。

### 2. 研究の概要

それぞれの美術館の鑑賞教育について実施状況

本論で対象とする美術館は以下の通りである。

#### ①米国

(1) ボストン美術館

(2) ソロモン・R・グッゲンハイム美術館 (以下グッゲンハイム美術館)

## ②欧州

(1) 英国, テート・モダン

(2) 仏国, ルーヴル美術館

米国の2つの美術館は2010年3月, 欧州の2つの美術館は2011年3月に調査を行った。4つの美術館を選んだ理由はそれぞれが鑑賞教育について特徴的な面を持っているからである。ボストン美術館は設立の目的に市民の教育を挙げ長きにわたって多くの実績を積んできた。グッゲンハイム美術館はニューヨークという芸術上重要な地域に立地し, 近年は興味ある教育活動を実施している。また, メトロポリタン美術館等と教員向けのプログラムを開発し実施している。テート・モダンはテート・ブリテンとともに学校に対しアウトリーチプログラムを行うなどしている。ルーヴル美術館は, 歴史的にも教育普及にはあまり縁がない印象を受ける。しかし映画「クラスルーヴル<sup>1</sup>」でもわかるとおり, 特定の学校と連携して教育を行うパートナー事業を行っている。また, 近年フランスで取り入れられた「諸芸術の歴史<sup>2</sup>」との関係もぜひ調査したかった。調査の方法は各美術館の教育普及担当者から直接話を聞き, 各美術館における鑑賞教育の目的, 方針, 位置づけを確認した。また, 電子メールでデータの詳細等, インタビューで確認できなかったところを確認した。ボストン美術館, ルーヴル美術館ではギャラリーツアーに参加し教育活動の現状を体験調査した。ボストン美術館では中学生向けのギャラリーツアー, ルーヴル美術館では教員向けの鑑賞ツアーに同行することが許可され両美術館のツアーの実態を多少なりとも体験することができた。本論では主にインタビューの内容を中心に進めていく。なおボストン美術館及びグッゲンハイム美術館では録音記録から翻訳を乾敬子氏<sup>3</sup>に, テート・モダンではプレイル佳詠子氏, ルーヴル美術館では福井伸子氏に通訳をお願いした。インタビュー記録では通訳の言葉をそのまま書き起こした箇所があり, 人称などで違和感がある部分がある。

### 3. 米国の美術館の鑑賞教育について

アメリカの美術館は設立当初から教育を重視している。アメリカの多くの美術館は南北戦争後に設立されており当初から教育は重視されている。烏賀陽梨沙は「教育活動は美術館の創設当初からの基本的な目的の一つとして明記されていたのである<sup>4</sup>」と述べている。これらの美術館は, 美術館における教育の意味を当初から理解していたと言える。このような中で美術館と学校との連携も早くから行われていた。まず始めにボストン美術館の鑑賞教育調査から述べていくことにする。

#### 3. 1. ボストン美術館

ボストン美術館は1870年に設立(開館は1876年)している。開館以来教育部門は重要な位置を占めている。今回の調査では教育部門の最高責任者であるバーバラ・マーティン(Barbara Martin)氏, 学校プログラムと教員リソース部門のトップであるウィラマリー・ムーア(Willamarie Moore)氏に話を聞いた。

以下要約である。

##### 3. 1. 1. インタビュー

小池(以下K): 美術館の教育活動にはどのようなものがあるか。

バーバラ・マーティン(以下B): ボストン美術館の教育活動には大きく分けて3種類ある。

第1は家族向けで作品も作る。第2は一般者向けのツアーであり、第3がスクール向けのもので作品を鑑賞しディスカッションを行う。たまに作品制作をすることもある。世界を探検するようなディスカバリーツアー（探検ツアー）がある。

K：学校で美術館に来るにはどのような形でくるのか。

B：必ずしも美術の先生と一緒に来るわけではない。例えば社会科の先生がエジプトについて勉強するために連れてくる。

K：教育活動の方法はどのようなものか。

B：子供に対する教え方はVTS<sup>5</sup> を使ったやり方で教える。ガイドが生徒に教えるものではなく、会話をしながら鑑賞するものである。例えば「おもしろいものは何？」というようなやり方である。VTSでは、インストラクターはファシリテーターである、としている。常に生徒の語ったことをパラフレイズし、簡潔に要点を繰り返すのである。

K：ツアーではどのようなプログラムを組んでいるのか。

B：通常1時間でカバーできるトピックに基づいた作品を選ぶ。選ぶ量は少ない。トピックは学校からいくつかあげられる。トピックにあう作品をほんの少し選んで、それを見てディスカッションしていく。それを見て生徒が何を感じるかが大切である。つまり多くの作品を短時間で鑑賞するのではなく、一つの作品にじっくり時間をかけて鑑賞して発見していくのである。

K：美術館へはどのような学校がどのくらいの頻度で来るのか。

B：学校によって違うが、通常一つのクラスは年に1回が多い。また、美術館は学校のカリキュラムに関連したテーマを開発しようとしている。

K：どの辺の学校から来るのか。

B：大体がボストンの近郊から来る。ボストンの市内の公立学校からはあまり来られない。理由は金銭的な問題である。どちらかというボストン近郊（郊外）の学校が多い。ニューハンプシャーからの中学生は2、3時間かけて来る。1日の遠足という形である。高校生はほかの州からも来る。

ボストン郊外の学校の一般的な例は、ツアーに約1時間、そのあと、1時間自由に鑑賞しランチを食べて帰るといったパターンである。

一つの学校からは1回が普通といったが、パートナーシップスクールというものがある。この学校はもっと頻繁に鑑賞に訪れる。現在8校あり、少なくとも3年は続ける。条件として教員全員がVTSの訓練を受けなければならない。パートナーシップスクールでは1ヶ月に1、2回美術館の指導者が学校を訪問し活動を行う。次に実際に生徒が美術館にやって来て本物の前でギャラリーツアーを行う。その後でフォローアップライティング（振り返りの活動）としてレポートを生徒が書く。アメリカの美術館は学校と協力してやっていきたい。協力体制ができています。

K：次にツアーについての質問である。どのように申し込むのか。

ウィラマリー・ムーア(以下W):ウェブサイトから申し込む。何がみたいか。何人ぐらいか。求めているトピックは何か。というようなことである。そして、そのグループを担当するガイドを割り当てていく。10人につき1人のガイドがつく。ガイド付きツアーのギャラリーインストラクターは全員ボランティアである。インストラクターは1年から1年半くらいの訓練を受けてからなる。

K：ボストン美術館における教育活動はいつごろ始まったのか。また、学校対象のエデュケ

ーションナルツアーはいつからか。

B：教育活動は100年以上行っている。創設は1876年で1906年にはもう始まっていたらう。年間2,000回のガイドツアーが行われていて55,000人の生徒がスクールプログラムに参加している。そのうち22,000人の生徒がギャラリーインストラクターのツアーに参加し、残りの33,000人はセルフガイドの参加である。

K：次にツアーの内容について質問する。もしも生徒が間違っただけをいってどうするか。

W：「そういう考えもあるかもしれないわね。考えられるかもしれないけど、他に何か見えない？」というようにグループ自身で間違いを正していくようにしている。

パラフレイズするとき広い意味の言葉を使う。例えば中国人を日本人と間違ったらアジア人と表現し間違っていない言葉を使う。つまり、グループで正解を見つけていくようにする。

K：ガイドツアーで重要なことは何か。

W：第1にどの作品を扱うか、である。第2に楽しませることである (to have a good time)。知識を詰め込むのではなく楽しむ、そしてクリティカルシンキングを養うことである。

### 3. 1. 2. インタビューから見えてくるもの

まず第1にボストン美術館における教育活動の歴史の長さである。開館当初から市民を教育するための機関としてスタートしている<sup>6</sup>だけに教育に対する姿勢も明確である。担当者も100年以上の実績に自信を持って述べていた。その歴史に裏打ちされた規模の大きさ、内容の確かさは、年間2,000回のガイドツアー、55,000人の生徒のスクールプログラム参加、といった数字からも示される。

内容面に関してはVTS (Visual Thinking Strategies) の考え方をベースにしているとのことである。VTSは我が国の美術鑑賞にも一つの理論的根拠として大きな影響を与えている。「ガイドが生徒に教えるものではなく、会話をしながら鑑賞するものである」「インストラクターはファシリテーターである」といった内容は現在我が国の美術館で盛んに語られている。実際にツアーに参加してみて、ガイドは参加生徒が積極的に発言できるように発問や応対を工夫していた。そして、要所要所で作品の意味や美術的な特徴、時代背景などの説明を加えながらトークをしていた。知識を詰め込むのではなく楽しむ、そしてクリティカルシンキングを養うことが大切であるという説明は我が国の学習指導要領にも通じる<sup>7</sup>ところであり、全く違和感を持たなかった。

美術館を利用する学校については、利用の問題点として米国においても金銭的な要因があることが改めてわかった。市内の公立学校はあまり来ないで近郊から多く訪れるということは以外であった。我が国では公立美術館を中心に多くの美術館で小・中学生が無料ということもあるが、地理的に恵まれている学校は公立であっても美術館を活用しているケースは結構あると思われる。このあたりについては今後さらに調査をしなければならないであろう。そういった状況の中でパートナーシップは美術館と学校をつなげる上で注目すべき点と言える。最短3年間という期間を設け美術館と学校が積極的にかかわりを持ちながら学習を進めていくことは、1回だけの特別な行事に終わってしまいがちな鑑賞活動を継続的にすることができる。また、全ての教師がVTSの訓練を受けるということは、図工・美術の教師だけではなく全員で鑑賞活動に加わるという総合的、複合的な活動につながるであろう。図工・美術が特別な一部の専門的な教師が教えるのではなく全員が取り組むべきものだと教師も子どもも考えることになるという点で画期的なことであろう。美術作品が決して図工や

美術という1教科に関するものではなく多くの学習に関連するものであり、美術館の存在も全ての教科、学習活動に有効であると捉えているのである。

### 3. 2. グッゲンハイム美術館

グッゲンハイム美術館は1937年に設立(開館は1939年)、現在の地に移ったのは1949年、フランク・ロイド・ライト設計の現在の建物ができあがったのは1959年である。以来50年の歴史があるが、教育部門で使っているサックラーセンターが開設されたのは2001年である。ここではスクールプログラムを中心に鑑賞教育活動全般についてシャロン・ヴァトスキー(Sharon Vatsky)氏から話を聞いた。シャロン氏は2010年3月現在 Associate Director of School and Family Programs という肩書であり、スクールプログラム及びファミリープログラムの統括責任者である。

#### 3. 2. 1. インタビュー

シャロン(以下 S): 月曜日にやってきたクイーンズ大学の学生さんたちの美術館教育の授業のために作ったパワーポイントをお見せしましょう。

(美術館の写真を見ながら)

この美術館のこの部分は1959年に完成しました。50周年をむかえます。こちら(8階建ての別館)の建物は1992年に増築されました。

(美術館の構造図を見ながら)

グッゲンハイム美術館はこの螺旋状の特徴的な建築で知られています。

小池(以下 K): フランク・ロイド・ライトですね。

S: そうです。

(組織図) サックラー美術教育センターはこのようになっています。センター長が日系アメリカ人の Ken Kanatani, です。センターは2つに分かれています。スクール・ファミリープログラムは先生、学生、家族のためのプログラムで私(Sharon Vatsky)が統括しています。成人プログラムは成人のためのパネルディスカッション、劇場、演劇関係などで、Christina Yang が総括です。ここでは public program と呼ばれています。

S: 「芸術を通して学ぶ(Learning through Art)」というプログラムもあります。これは、学校で行なわれるものです。「アーティスト(artist in residence) 学校配置プログラム」です。アーティストが学校に配置されます。アーティストは1年間、週1回生徒と会い、生徒は3回美術館に来ます。そして、教えるアーティストはカリキュラムにあわせて、先生と協力します。社会学、英語などのカリキュラムと関連させます。そして、作品を作り、年度末に展示をします。その写真をお見せします。展示はプロの手による大変専門的なものです。

1ヶ月間一般のギャラリーで行なわれ、レセプションもあります。他の展示をするプロが子供の展示も手がけます。そして、何人かの子供たちと協力し、大人の人に自分の作品について話せるようにします。(写真をみながら) 彼女がギャラリーを回るのではなく、ある場所にとどまり、その場所で説明するだけです。子供たちがギャラリーのあちこちにおいて、おとなが回ってくるのです。子供たちはそれぞれ自分の持ち場の説明をします。これは彼女(説明をしている子)の肖像画です。彼女がどのように見えるかですが、それは、彼女の内面的自分を表しています。なので、これは、彼女の心理的肖像画です。

私たちは教育省の助成金を受けて、学校での美術教育を子供たちの話す力を伸ばすことに関

連させてリテラシー(読んだり, 話したりできる能力)を研究しています。そして物事を批判的に見ることも。

新しい企画もあります。6月3日と4日に「問題解決技術」についての会議があります。問題解決の技術として Experimentation (実験), brainstorming (ブレインストーミング), breaking down a problem into parts (問題を分析), rethinking a problem (問題について再考), making decision (決定)等があります。

これもここで行なわれるプログラムです。あらゆる年齢のクラスがやってきます。これは高校の生徒が作品について話しているところです。その後, 制作します。1時間15分ギャラリで, そして1時間15分制作をします。このクラスの場合, マシュー・バニー (Matthew Barney) ショーに関連したものを作っています。彼は自分の映画のキャラクターを創作しました。それで, 生徒たちは自分のキャラクターを制作しました。

これはキース・ヘリングのショーです。

K: 生徒は1クラス何人ですか?

S: 最大 30 人です。部屋が小さいですからね。もっと大きな部屋がほしいのですが, 今はそれだけしか入りません。放課後のクラスもありますよ。

これは毎年夏にグッゲンハイム美術館, メトロポリタン美術館, MoMa, ホイットニー美術館が共同で行っている世界の教員のためのプログラムです。インドネシア, アブダビ, メキシコ, ブラジル, たしか, 日本からも参加者がいましたよ。これはどのように近代・現代美術を授業に取り入れるかについてです。どのように美術館で教えるか, そして作品を前にして, そして授業内でも, これらのディスカッションのやり方を使うかです。

「ファミリープログラム」と呼ばれるのもあります。家族で来ても多くの場合美術館で何をしたらよいかわからないのです。そこで, いろんな活動を用意しています。話や活動, アイディアがかかれたパックをかりて美術館で使えばよいのです。お見せしたのが, 家族向けガイドです。

このウェブサイトをご存知ですか? (グッゲンハイム美術館のウェブサイト)

この下のところを見てください。これがカリキュラムです。「芸術を通して学ぶ (Learning through Art)」のページもお見せしたいです。教育のページにいて, そして学校・教育者のページ, 美術教育のページで, イントロダクション・6 作品があつて, そして質問事項があります。

だから, 教室でも行うことができます。教室でディスカッションすることができるし, 教室で使えるアイディアもあります。ここに生徒を連れてきてツアーで使うこともできれば, 教室でカンディンスキーについて勉強しているときに使うこともできます。よいものです。

世界中で使えます。

また, 美術館に来る前 (事前学習), 来た後 (事後学習) で使うこともできます。何が行われているか知ることができます。ここをクリックすると「芸術を通して学ぶ (Learning through Art)」のページです。「芸術を通して学ぶ (Learning through Art)」は作品を作るだけでなく教室で芸術を鑑賞し, 議論することができるので, たいへんよいプログラムです。だから, わたしたちは作品を作ることを「art exploration」と呼び, 作品を鑑賞し, 議論することを「inquiry with art」と呼びます。

ここをクリックすると, 映像が流れます...

(学校で子供たちが議論している映像)

それで、「inquiry」を行います。それは、一連の質問と... これは教員が見せたり、話したり、共有したいと思っているからです。

また、「trouble shooting (問題解決)」というのがあります。教室のなかで起こっていることを見せるのではなく、他の先生がやってみようというようなものです。わたしは、生徒たちに勉強している作品についての情報を学んで欲しいのです。いいかえれば、これは誰かが話しているところを、あなたは見るができるのです。教員がなにをしているのかについて話すのを聞くことができます。ここにはまた、たくさんのレスンプランや Inquiry model (質問の仕方の例)等がのっています。

K：学校が美術館を訪問する機会を作ることにどうしたらいいと思いますか。

ニューヨークも同じ問題を抱えています。お金がない学校が多いのです。交通費がないのです。だから、ニューヨークでもむずかしいのです。生徒を連れてくることのできる学校にいる先生もいますが、多くの先生はそれができないのです。また、ニューヨークではすべて校長先生にかかっています。校長が美術が好きだとできるし、校長がすきじゃないとできない。おかしいけど、ここにも問題はあります。学校内で行うプログラムがいいのか、放課後のプログラムがいいのか、また週末に家族に来てもらってそれから、学校にひろげるのがいいのか迷っています。

美術館は 50 年たちましたが、教育部門は 1990 年代末に始まりました。大変後になります。初期のころの館長は美術館教育の信奉者ではありませんでした。だから 1990 年代末のことです。このスペースは 2001 年にオープンしました。大変新しいものです。それが、私たちが学校で行ってきた「芸術を通して学ぶ(Learning through Art)」プログラムのある理由の一つでもあるのです。

このプログラムは 40 年たちました。学校と美術館両方のプログラムがあったわけではありません。学校に出かけるプログラムだけがあったのです。アウトリーチプログラム (学校に出かけていくプログラム) のほうが館内で行うプログラムより古いのです。

K：アウトリーチプログラムは人気がありますか？

S：はい、人気なので、ウェイティングリストがあります。担当するスタッフが十分でないのです。プログラムを導入したい学校はたくさんありますが、15 校にしぼらなくてはいけないのです。1 年に 15 校ですが、多くの学校は継続します。ニューヨーク市内から 15 校です。効果を得るために、継続して同じ学校に行くようにしています。次から次へと学校を変えると効果を十分に得ることができないのです。そのように私たちは考えます。スペインのビルバオにもグッゲンハイム美術館があるのですが、そこでは政府から毎年別の学校に行くように指導されます。毎年新しい先生、校長先生が来るようなものです。プログラムがうまくいくようになったらお別れです。

その 15 校はラッキーな学校ですね。これらの学校はプログラムを行うために費用を少し払います。しかし、美術館がお金の大部分を集めます。この学校で行うプログラムはたぶん年間\$25,000 かかりますが、学校が払うのは\$7,000 ほどです。学校は費用の一部を負担し、大部分は美術館で負担します。学校がいろいろな方法でお金を集めます。親の会が集める場合もあります。美術館もお金をあつめますし、企業も、いろいろな助成金もあります。

K：年何回学校を訪問しますか？

S：先生 (教える芸術家) は週 1 回、20 週、学校へ行きます。

このプログラムの教材を差し上げられるとおもいますよ。その多くはウェブサイトにも載

ってまいす。

K: スタッフは何人ですか?

S: 今は12人です。少ないでしょう。14人いたのですが、経済情勢悪化のため削られたのです。ボランティアもいますが、ほとんどはパートタイムです。ツアーをやっている人はパートタイムのスタッフです。その仕事をする人が15人、「芸術を通して学ぶ(Learning through Art)」プログラムで学校へ行く芸術家が15人います。

K: 夏の教員向けニューヨークの美術館合同のプログラムはいつ始まったのですか?

S: 私たちが8年前に始めました。素晴らしいプログラムです。受講する先生にとっても良いプログラムです。もしこれがなかったら、地元の提携している小さい美術館だけで活動することになります。ここで、集まって、話し合っ、プログラムをより良い物にする、我々にとっても、素晴らしい1週間です。

K: どの学校種がよくきますか?

S: いろんな学校が来ます。小学校も高校も来ますよ。幼稚園から5年生まで、そして中学校もきますよ。高校生と低学年の生徒が来やすいですが。就学前の本当に小さい子供も来ますよ。いろんな年齢がきます。

K: 地域は?

S: 地域の学校も来ますし、修学旅行でニューヨークに来た高校生が来ることもあります。年齢に応じて、いろんなことができます。先生が話し過ぎないようにすることが大切です。優しく接することが必要です。教室で行ってみてわかったのは、多くの場合、ディスカッションを始めると、生徒が話し始めます。先生は生徒の言うことをサポートすればいい答えがたくさんかえってきます。間違った答えはないのです。正しい答えの方が多いです。「だめ」というのはないのです。たくさん行えば、だんだんよくなってきます。

### 3. 2. 2. インタビューから見えてくるもの

グッゲンハイム美術館での教育プログラムは比較的新しい。「教育部門は1990年代末に始まった。初期のころの館長は美術館教育の信奉者ではなかった。」という話のように初期は館内での教育活動はあまり行われていなかったようである。一方でアウトリーチプログラムである「芸術を通して学ぶ(Learning through Art)」プログラムは40年の歴史があるという。ここでは館外に出て行う教育プログラムの方が歴史がある。それはこの独特の建築にも原因がある。フランク・ロイド・ライトによる独特の形態は確かにギャラリートークにはなじまない。実際ここでの小中学生を相手にしたギャラリートークは困難な印象を受けた。ギャラリートークという鑑賞活動は物理的な環境も重要だということである。

ここで特徴的なのは、「芸術を通して学ぶ(Learning through Art)」プログラムである。アーティストが実際に学校に行つて活動を行うものである(artist in residence)。アーティストが年間を通して教師と連携し活動する。そのときに単に図工・美術とだけでなく社会科や英語科など多くの教科とかわり合ひながら活動をしていくとのことである。さらに美術館で展示を行う。展示も本格的なものでギャラリートークも行うとのことだ。このことを見ると、子どもたちが行っているのは単に美術の鑑賞や制作ということではなく教科を超えた総合的な学びなのである。しかもアーティストやキュレーターといった専門家と子どもたちが一緒になって活動をしているのである。シャロン氏によるとこの活動に参加できるのは年間に15校だそうである。しかも複数年継続するので実際はもっとわずかである。この数は余りにも



少ない。しかしとにかく平等に多くの学校を、ということになると活動は表面的な内容の薄いものになってしまうであろう。アーティストと学校と美術館との協力による密度の高い活動を考えた場合現在の規模になるのは妥当性があると考えられる。もう一つの問題点は費用である。インタビューによると、年間\$25,000、学校側も\$7,000を支払う。このような活動を日本で行うことを考えた場合、プロジェクトの規模や学校の選択といった様々な問題から多くの困難があると感じられた。米国で取り上げた2館では費用の面で大きな制約があるのがわかる。

次に興味を持ったのが、「学校での美術教育を子供たちの話す力を伸ばすことに関連させてリテラシーを研究している。そして物事をクリティカル（批判的）に見ることも研究している。」というところである。「説明し合ったり批評し合ったりするなどの言語活動の充実」という今回の新指導要領とぴったりと重なるのである<sup>8</sup>。これらの研究は教育省と連携してやっているとのことであり、今後の流れがますます注目される所であり、我が国への影響なども見ていきたい。

#### 4. テート・モダン (Tate modern) の鑑賞教育について

砂糖業で財をなしたサー・ヘンリー・テートが設立したテートは現在、ブリテン、リバプール、セント・アイヴス、モダンの各館がある。テート・オンラインを5つ目のテートとする場合もある。テート・モダンでは Material Gestures (物質の意思表示), Poetry and Dream (詩と夢), States of Flux (流動期), Energy and Process (エネルギーと過程) というようにテーマごとに展示を行っている。



図1：テーマごとの展示室

##### 4. 1. インタビュー

Emily Pringle 氏 教育担当 より話を聞く

2011年3月9日

小池（以下 K）：私は前にいた学校が国際バカロレアシステムを導入する学校でしたので、元々は日本のシステムを研究していたが、海外にも興味を持ってアメリカのニューヨークやボストンの美術館の教育システムをみてきました。調べてみるとアメリカの美術館教育システムは進んでいて開館当初から教育活動を行っていました。

Emily Pringle（以下 E）：こちらもそうなんです。すべての博物館やギャラリーは国から基金をいただいているので教育というものに関してそれを使っていかなければならないのです。それを行っていかなければならないのです。1970年代からこちらでは平行して教育を取り上げています。

K：アメリカでは昔からあってイギリスではいつ頃からあるのかということ調べて来たのが今回の調査の目的のひとつです。

E：テートはだいたい1870年頃オープンした。その頃からオープンした目的は一般の人を教育するという目的でオープンしたそうです。

K：ということは1870年頃から教育システムは始まっていたということなのですね。

E：そうです。普通美術館というのは美術を見せるというのが目的ですが、こちらの目的

というのは美術を見せるというだけではなくて一般大衆を教育するのが目的となっているとお考えください。

K: ヨーロッパの美術館はだいたいそうなのではないでしょうか。ほとんどの美術館は美術を見せるのと教育はセットで行われているのですか。

E: イギリスでは大変進んでいると思いますが、私 (Emily Pringle) がドイツとかフランスとかイタリアとかの同じ職業の方と話をするとその方たちはイギリスの方が進んでいると言っていますし、そちらの国々でもそういう傾向にはなっていると思いますけれどもやはりイギリスが先駆者だと思います。

K: テート・モダンの子供たちに対する鑑賞教育の特徴はどんなものか。

E: 2つあります。ひとつはアーティストを招いてそのアーティストを教育者とします。ここでは先生というものを雇ってそういうものを(アートを)教えません。そしてもう一つは美術自体をみるということです。

T: そのことについて説明してください。(通訳)

E: まず美術を教えるということではありません。そこから自分たちが学び取るということです。質問すること、考えること、そしてそれをリフレクトすること。一番重要なのはその意味を考えることです。ですからまず質問したり、考えたりそしてそれによってどのような反応があるかということを見て子供たちがそれを見て考えだしたり、思いついたりすることが重要です。何も考えないこともありますよね。そういうことではなくてひとつのものの意味というものを考えることを大切にしているのです。

T: たとえばどういうことですか。(通訳)

E: たとえば絵がありましたら、これは誰々さんのどういう絵ですというようには始めません。これを見てどう思いますかという質問から子供の質問や疑問などを触発するということです。

K: アメリカに行ったときに VTS の考え方がありました。その考え方は元々はイギリスから来ているものなのですか。

E: そうです。そしてそれはアーティストから来ています。ですからアーティストがどういう風に考えてそれを作ったかということを考えて行くという意味でそれは大切なことです。

K: CSAE<sup>9</sup> がイギリスであったそうなのですが、その流れが続いているのでしょうか。VTS に続いているのでしょうか。

E: ひとつの型というものに、はまってそれに準じているわけではありません。いろんな方向からいろんなアイデアをいただきまして、こういうものももちろん念頭に置いてやってきたわけです。アーティストはどんどん新しい人が出てくるわけです。ですから、ひとつのオーソドックスなアイデアに基づいていくということは全然考えていません。新しいアーティストを呼んでくるというのはその意味でいろいろなアイデア、考え方、コンセプトというどんどん変わっていくものをどんどん取り入れていきたいからです。

K: 誰がアーティストを捜してくるのでしょうか。

E: まずラーニングチームというものがあります。私 (Emily Pringle) がヘッドです。そしてそれには学校と先生たち、若い人たち (young people)、家族、大人、written form といひまして壁に書いてある説明書きにチームが分かれていますそのチームが考えてアーティストをお呼びするということです。

K: リトニフォームというのは。

E：インラブリテーションという中に入っているんですけどもオーディオガイドですとか、リーフレットですとか、説明ですとかそういうものが全部含まれているものです。後はもう一つデジタルですね。デジタルラーニングです。ウェブサイトに載せているすべての情報です。

K：スタッフは5人ですか。

E：いえ、5人ということではなくて6つの部分に分かれているということです。それぞれ5人から10人のスタッフです。デジタルは1人だけです。

K：学校との関係を伺いたいのですが。学校は年間どのくらい利用しているのか。

E：25万人くらい。です。1年間にはっきりした数がお知りになりたかったら email しますが、ただ学校の先生に連れられてやってくる方もいますし、予約をしてくる人もいますからはっきりしたことはわかりません。いろいろなやり方があります。ただ先生に連れられてくる生徒もいます。それからこちらに申し込んで、アクティビティーをやる学校もある。それから長い関連を持っている学校でいろいろなアクティビティーを続けてやっている学校もある。そういう学校にはこちらから希望があればアーティストを送ってお話することもあります。

K：アウトリーチプログラムについて伺いたいのですが、

E：テート・モダンとテート・ブリテンのアウトリーチプログラムは協力してやっています。すべてのことを両方合同で考えています。それからリバプールとセント・アイブスを含むこともあります。テート・ブリテンではロンドンの東側の学校と6週間の教育のプログラムを持っていて、その間には先生を教育することもあります。そしてそこでできた作品をテート・ブリテンに飾るということもあります。

E：イギリスはワイドカルチャーの国ですから、たとえば学校へ行くとほとんど移民の生徒の学校もある。文盲率というものをみると東側が非常に高い。だいたい第2外国語として来ている生徒が多い。そして文盲率を美術の活動を通して少し下げることができました。

K：それは成功していますか。

E：非常に成功してます。バーバルアイズ (verbal eyes) というプロジェクトです。話す目ということですね。6年も続いています。ウェブサイトで出てきます。

K：バーバルアイズはテートが行ったプロジェクトですか

E：そうです。どのようにこれが発展したかというテート・ギャラリーというのは非常に裕福なテイトンドアイルというお砂糖の会社が始めた訳なんです。そしてそのテイトンドアイルが資金を調達してくれています。そして砂糖工場は東にあると思います。そういう関係もあるんですよ。

K：「芸術を学校へ」というようなプロジェクトが数年前にあって学力を上げようという活動があったと思うんですが。

E：はい、教育の度をあげるというものもありますし子供たちの創造力を上げるという目的もありましたけれどもこれは労働党のやったものです。膨大なお金をかけたのです。あるプロジェクトは成功したものもあるしそうでないものもあります。ウェブサイトにたくさんのインフォメーションが載っています。クリエイティブパートナーシップです。

K：この美術館のエデュケーションシステムですけども、日本ですと美術の先生が連れてくるが、他の教科の先生が連れてくることはありますか。

E：主に美術の先生が連れてきます。歴史の先生、英語の先生、宗教の先生そういう先生が

連れてくることもあります。それはもちろん宗教を勉強するということによって宗教とか哲学を考えるとという絵を通してですね。

K：ニューヨークのオルバニーという町に行ったのですがモダンアートを通して数学を勉強しようというようなワークシートがありました。そのようなプロジェクトはありますか。

E：もちろん科学ですとか数学ですとかそういうことに目を開いてほしいということはもちろん進めています。なぜかというアート先生というのはアートだけに固執しがちですからそうでないところに視野を広げてほしいということがあります。

K：イギリスでは多角的に教えることがあるようなのですが。

E：小学校では一人の先生が教えますね。いろいろな教科を教えるのですがアートを教えるのに自信がない先生に自信を持たせるような教育をするということもしたいですね。

K：先生を教育することについて教えてください。

E：トレーニングをする趣旨がありましてインサービストレーニング、夏やハーフタームの休みに4、5日のコースがありましてアーティストを呼んできてトレーニングを行うことがあります。

K：もう少し聞きたいのですが時間ですね。ありがとうございました。

#### 4. 2. インタビューから見えてくるもの

Emily Pringle氏によるとテート・モダンの教育活動の特徴は第1に「アーティストを招いて教育者とする」第2に「美術自体を見る」ということである。美術を教えるのではなく子どもたち自身が学びとることを重視している。質問し、考え、ふり返ることそして、対象や見ている自分の存在について意味を考えることを重視している。ボストン美術館同様、絵画的な知識から入るのではなく、作品について子どもたちが質問をし、会話をしながら鑑賞していくことを重視している。ここでも我が国で行われている対話を重視する鑑賞に近い活動が行われている。美術作品を鑑賞者自身が捉えるべき位置に置き、鑑賞者が自分たちの生活を踏まえて作品について意見を言い、考えていくことを提案している。特にテート・モダンはテーマ別に作品を陳列していることなど独特の展示方法を持つ。いわゆる西洋史的な陳列ではない。長井理佐は「ここでのねらいは、身近な問題へとつながりうるテーマを設定し、テーマに沿って集められた多様な作品を鑑賞することを通じてそうした問題を新たに考え直す<sup>10)</sup>」と述べている。美術と日常を考えながら鑑賞することがここでは正面から行われている。現代美術を扱っているという特徴はあるが、展示方法一つとっても鑑賞者に作品の内容について考えさせようとしているのであろう。美術を見る、感じるとは、他人事で捉えるのではなく自分の住んでいる社会、自分の存在と常に関連づけながら、能動的にかかわっていくことなのであろう。

そしてもう一つ重要な点が、アーティストの存在である。筆者は、Emily Pringle氏が活動プログラムを作っていく上でアーティストの役割を非常に重視しているという印象を受けた。氏はアーティストがいかに考え、いかに制作したかを考えることが大切なのだと言っている。つまり、アーティストの存在を意識しながら鑑賞を進めていくべきということなのである。

テート・モダンはグッゲンハイム美術館同様アウトリーチプログラムを重視している。プログラムはテート・ブリテンと共同で行っているとのことである。6週間の教育プログラムというある程度のスパンを持った活動である。やはりここでも、中長期的に美術を通して学

校とかかわっていくことは重視されている。また、文盲率を下げるなど大きな成果を出した (Verbal eyes) でもアーティストの存在は大きい。テート・ブリテンの教育担当責任者ハリエット・カーナウ氏はアーティストが学校に入ったことにより「教師が美術についての専門性を高める点で大いに意味がありましたし、それは子どもにとっても意味のあることでした<sup>11)</sup>」と述べている。また、山木朝彦、井上由香は「バーバルアイズは(中略)人間と人間の濃密なコミュニケーション・プロセスを重視し、子どもたちの表現力を増進させようと試みるプロジェクト<sup>12)</sup>」と述べている。単なる資料をもとにするのではなく、作り手であるアーティスト、受け手である子ども、そして教師という人間を中心に考えることが大切だと言っているのである。このような流れが我が国で根付くかどうかは芸術と教育とをどう捉えるかという今後の問題にかかわってくるであろう。

## 5. ルーヴル美術館の鑑賞教育について

ルーヴル美術館では教育担当 Frederique Leseur 氏 Cyrille Gouyette 氏から話を聞いた。ルーヴルは規模の大きさ、収集作品の量、質等世界でもトップの美術館である。ここでは歴史的に見ても教育普及についてそれほど重視していないのではないかと、また VTS 等にみられる鑑賞者が対象について発言しながら見方を深めていくという鑑賞法は実施していないのではないかとこの事前の印象がありそのことについて聞くことを中心とする調査であった。また、最近フランスで小中高等学校の授業に組み込むことが義務化された「諸芸術の歴史」についてルーヴル美術館はどのような役割を演じているのかを確かめるのも目的の一つであった。

### 5. 1 インタビュー

2011年3月11日ルーヴル美術館事務棟

Frederique Leseur (以後 F) : 今回の訪問の大きな目的というのは美術館教育における学校と美術館との関係はどうなっているかということでしょうか。

小池 (以後 K) : そうです。

F : 美術館はフランスにたくさんありますが、教育についてルーヴルの特徴は何かということをお話します。

F : ルーヴルが他の美術館と違うのは非常に有名で来館者も非常に多い。年間 850 万人の来客がある。非常に有名でパリの真ん中にある。おいてあるコレクションもフランスのものパリのものだけではなくて世界中のものが置いてあります。それが1つの特徴であり難しいところでもあります。なぜかという、すべてが受け入れられる可能性があるのも私たちのリミットがどこにあるかというのが難しいと考えているところです。

あとやはり学校の先生がサイトなどを見て教えてくれるのはいいのですが、実際に生徒を連れて美術館に来てくれるように一般者とは別に学校関係者用に書類を作ったり、いろいろなアイテムを作っています。

他のミュージアムはそんなに混んでない、要はそんなに金銭的に潤ってないところが多いので彼らにとって生徒がくるというのはつまりお客が来るという形になっているのですが、ルーヴルはそういった必要がない。お客さんは既にいるので、私たちは学校の関係者、生徒が来るときはクオリティを第1に考えています。

F : 明日の朝先生を対象にしたツアーがあるが、学校の先生用にルーヴルの方から提案して

いる。学校の先生方がルーヴルを訪れたり、ルーヴルで作業をしたりというのはすごく今需要があって、非常にうまく機能している。以前はそれが目的だったんですけども、学校の先生に来てもらうというのが。でも今はそれが目的ではなくて。今の目的は先生たちを教育するというのでしょうか。先生たちに来てもらって、やってもらって美術の知識を高めてもらって自分たちのものにしてもらって生徒にそれを伝えてもらうというのが、目的です。

K：先生は小学校の先生が多いのですか。

F：小学校から高校まで全部のところが平均的に来ます。

K：例えば体育であったり他の教科の先生も来ますか。

F：中学高校はフランス語の先生，歴史地理の先生，外国語の先生，美術の先生，小学校は全科の先生です。

通訳（以後 T）：これはフランスで 2 年前から始まった新しい必須科目だそうです，小学校では 2 年前から中学校では去年から高校では今年から始まった授業です。

K：「諸芸術の歴史」というものですか

F：はいはいその通りです。そこにはもちろん美術も入れればダンスも入れれば料理も入れればいろんなものが入ります。ですから美術の先生だけでなく例えば文学を教えている先生もかかわってくる。別の先生も入ってくる。そういう必須科目です。

K：それにルーヴルもかかわっているということですか。それを質問したいのですが。

F：これを始めたのは教育省ですが，こちら（ルーヴル）は文化省です。2 つの違う省庁の部署がやっているんですけども，でも協力し合ってやっていこうという協定がありまして。

K：教育省と文化省は違うわけですね。

F：ルーヴルは文化省です。人類博物館というんでしょうか。それは教育省です。3 つ大きな博物館が教育省に属していますがほとんどは文化省に属しています。で，協力し合ってやっていこうということになって，20 年くらい前から学校が美術館を訪問しようということになって，実際に鑑賞しようという教育方法があって，これが始まったことによってさらにそれが活発になったということです。

T：先生たちを対象とした講習をすごくやっていたとおっしゃっていましたが先生たちがこの「諸芸術の歴史」をどのようにするかを学ばなかった，学ぶ機会がなかった，今もない，なので，先生たちからルーヴルにこういうことをやってほしいという要求がすごく大きいそうです。

Cyrille Gouyette（以下 C）：何年か前からこのような違う講習をやっています。これはカタログです。いろんな講習の。段階が分かれています。それからいろいろなタイプの講習もしています。参加の方法としては先生が個人的に美術館に，参加したいんだけどっていう問い合わせをして，申し込むこともできます。グループや学校がオーガナイズして「先生たち行きますか」と言って参加することもできますし，町といいますか（教育委員会とか？小池，発言）はい，そういうところが声をかけて参加する方法もあるそうです。

学校の先生だけでなくアソシエーションで絵を教えていたり，退職した先生が夏休みだけ



図 2：展示室内での講習

教えていたりするそういった人たちも対象になるそうです。

F：ここで対象になるのは学校で教えてない人も対象になると言いましたが、学校で教えているけれども先生でない人も対象になる。それはどういうことかという、例えば学校の宿題があって生徒が家に持って帰ります。それをお母さんが教えたいけれどもお母さんがわからない場合がある。そのお母さんを学校で教えていることがあるんですけどもそういう人たちは先生でなくて外部の人たちなんですけど、そういう人たちも対象になるんだそうです。お母さんは参加できるのかと聞いたのですが、それはできないそうです。あくまで教える人が対象になるんだそうです。

C：いろんな段階レベルがあって、最初のメッテオロジーといいますか、要は方法を教える、どうやって鑑賞していくかって方法を教える、のがまず1つです。

C：ここに日にちが書いてありますが、自分で何をやりたいかを選ぶことができ明日、これだそうですが、絵はどうやってできているか、何からできているかっていうのがあったり、彫刻の講習があったりいろんなことをやっています。もちろんフランスの絵画について、イタリアの絵画について歴史についていろんな講習があります。

K：それはいわゆる講義（話すだけの）の講習なのですか。

C：両方です。アトリエでこの写真のようなこういった別の資料で勉強したり、美術館へ行って確認したりっていう両方あります。

C：目的の1つにはそういう先生たちを教育するっていうこともあるのでその歴史がどうした、テクニックがどうしたというのを深く教えるのではなしに、先生たちがどうやってそれを活用できるのかを重視してやっています。ただ歴史がどうだと永く深くやるわけではないです。

F：これは一般にも売られているんですけども、講習へ参加するように作ったテキストです。これはエジプトについてこれはイタリアについて。6歳から10歳、12歳の生徒がこういうコンポジションを学ぶそうなんですけど。テキストは貸出しをしているそうです。

中学校や高校の美術の教育は例えばイタリアのルネサンス期の美術、15世紀の美術、コンテンポラリー美術といういわゆる美術的なことで分けているのではなくて今ここに載っていますけれども社会のソサエティーの美術というんでしょうかそういった美術をルーヴルの作品で扱って作ったものなのです。

K：これは教科書<sup>13</sup>ですか。

F：これは教育者用に作ったもので、でも例えばパリから遠いボルドーや別の町に住んでもその生活の美術という質問が出てきたときにそれに関するルーヴルでみられるものは何かというものが書いてあるそうです。もちろん教育者用に作ったんですけども普通の書店でも売っていて一般の人でも買えるそうです。

F：それぞれのチャプターに質問があってアートはアートなんですけども、壊れたもしくは続いていくというように質問をまず投げかけていくものです。ここにそれは何かっていうのが書いてあってさらにベーシックな質問があってそれに匹敵するルーヴルの作品が何かっていうのがここに載っています。紫のところはここに載っている作品の分析が載っています。でここはこわれたか続いていくかっていう芸術のどこなんですけども、まずこれを見せてこのところにそれについての説明が書いてあります。ここにはさっきも申し上げたように分析が書いてあります。2つの書いてあることがなぜかというこの作品はこのチャプターに選ばれましたけれども別の視点から見れば別のところにも入る可能性がある。なので読んで

いる人をこのカテゴリーにこの作品を当てはめてしまうような読み方をしてほしくなかったの、この作品はこういうことですよっていうこのテーマとは違ったこの作品についてのことも書いてあるのだそうです。

例えば同じことの説明ですけどもこれはマリア様が生まれたばかりのキリストを抱いている像ですけども例えばこれは宗教の美術のところにも入る可能性があるのです。

K：ここは壊れた美術というテーマですか。

F：壊れたとか途切れた美術ということでしょう。途切れたか続いていくかということでしょう。チャプターの最後には必ず現在のルーヴルはどうしたということも書いてあります。

F：いま途切れたか続いていくのかっていうところの最後のところになってなぜこれが選ばれたかっていうとこの天井画が最近のモダンアートのアーティストが描いたものですがアンティックのものに通じるものがあるのでこれを選びました。

K：途切れた芸術とは何でしょうか。

F：それは壊れたということではなくて例えばルネサンス時代の美術というのはいつか終わってしまった。でいろんなアーティストがいますけれども続いていく芸術もあるが、それまではこうだったのが次の時代にはまったく違ったものになると。その比較をしているチャプターであると。多分途切れるというのは西洋に多いのではないかと、日本の芸術は時代時代によって引き継いでいっているのではないかと。ルネサンス期、何々期は西洋にしかないのではないかと。

F：この本の重要な点はCDがついていましてこれを使って生徒に説明するときにこれをやれば生徒は画面を見ながら先生の話の聞けます。

今説明したのは学校の先生を対象とした講習や活動ですが、今から説明するのは学校の先生がクラスに戻って教室で使う道具です。この箱の中にはこういった附属品や本が入っています。

K：キットになっているわけですね。

F：やっぱりここには分析が載っています。歴史やその作った人のことやテクニックのことが載っています。この最初のところは先生用に書いてあるもので、先生が教えるために知るべき情報だそうです。

F：これはいろいろ書いてあって生徒が書き込めるようになっています。

F：CDにもこの欄があってスクリーンに映し出して使うものです。

K：例えばこの欄は何がかいてありますか。

F：これは生徒が向き合って相手の生徒には見せないでこれはこうだと説明して後で見せるものです。

F：日本でもこういうようなことはやっていますね。

K：いわゆる美術史から入るのではなくこういったことから入るのがありますね。

T：生徒は楽しそうですね（通訳）

F：ルーヴルのサイトをあけるとオンセンニョンと書いてるところがあるんですが、それは先生という意味なんです。教えるとかいう意味なんです。

今説明したのは講習の部分、発行している部分、もう一つは3つ目のアクティビティーがあります。インターネットがあってローランサンという別の人がやっていますが無料で見られる情報がサイトに載っています。そこにはアエヂカッションかな、先生用のところがあっ



て誰でも見られます。

さっきも出ましたけれどもパートナーという大事な作業もあって、パートナーを結ぶという仕事があって毎年あって1年間に大体50の大学だったり、高校、中学だったりするんですが、パートナーになりまして、いろんなテーマをそのパートナーたちと一緒に作っていくそうです。

1年ではなくて2～3年もしくは4年同じ教育機関とパートナーを結ぶそうです。「クラスルール」はたくさんいるパートナーの1つを紹介したフィルムだそうです。選ぶパートナーというのは美術学校だったりもするんですが、難しい地域の学校も選んで、もっとルールを知ってもらう、美術を知ってもらうというのも大きな目的です。K:「クラスルール」の学校も確かそんな学校だったと思うのですが。



図3：展示室内でのパフォーマンス

F: パリの中ですが難しい場所です。パリの19

区の学校です。もちろん学校とやることは美術を知ってもらうのも目的ですがその学校の先生、かかわる先生たちは話し合うなりして1つになりますし、他のところとコンタクトを取る可能性もありますし、教育者同士の交流も広がっていくのも1つの目的だそうです。

F: 美術館というのは以前、美術館というよりここで働いている職員キュレーターの仕事はこの作品の歴史は何だとか作者は何年に生まれたとか紹介だけだったんですけれども、こういう今の私たちのミッションはいろんなことをやることによってルールに飾ってあるものだけではなくてもっと他にも目を向けてほしい、それらが大きなミッションの1つです。

## 5. 2. インタビューから見えてくるもの

ルール美術館の特徴としてまず第1に挙げられるのがその規模であり、コレクションの質であり、量であり歴史である。年間850万人という入館者数は2位の大英博物館560万人を大きく引き離している<sup>14</sup>。Leseur氏はルールは金銭的な問題を考えずに「生徒が来るときはクオリティを第1に考えている」と述べている。これは他の美術館とは明らかに違う。そして、先生に美術館へ来てもらう目的は、美術の知識を高めてもらって自分たちのものにして生徒にそれを伝えてもらう、ためなのである。また、ルールで教師などの「教える人」を対象に講習を行っているが、それは基本的に、美術を教えるためでありそのための知識や技能を高めるためと受け取ることができた。例えば彫刻の講習であったり、絵画の歴史の講習であったりというものである。ただし、単に歴史だけを扱うのではなく、それを先生がどうやって活用するか重点を置いている。この点でもいわゆる対話式の鑑賞法や、子どもたちに質問をしながら自由に考えさせながら鑑賞していくという方法はルール美術館では主流ではないと考えられる。実際に教員向けの鑑賞ツアーに参加したのであるが自由に対話をする場面はほとんどなく、ガイドが絵の特徴について説明し、美術史的な流れ、図像学的な特徴など知識を身につけるといったものが主であった。また、鑑賞のあとのワークでも遠近法の消失点を求めていくといった内容であった。もちろん単に美術史的な知識を教えるといった内容ではないが、美術史や美術の図像学的な意味を重視する面は強く感じられた。しかし教育普及という面では、日本でも公開された「クラスルール」に見られるように、パート

ナー事業など積極的であることがわかった。パートナーは 50 くらいで、2~4 年間継続して活動するそうである。ここでも長期的なスパンで学校とかかわって成果を上げていることがわかる。また、パートナーの相手は教育的社会的等様々な面で問題となる地域の学校とも関係しているとのことである。訪問したときに見学することができた、美術館内でのパフォーマンスも教育的に困難な地域の学校の生徒も参加しているとのことであった。この活動も単発的なものではなく、美術館外で催物を何度かやり最後に館内で行うとのことである。こういった面を見ると規模も入場者数も世界一と言ってよいルーヴル美術館でも積極的に教育活動を行い、しかもパリ市内にありながらも美術とはほとんどかかわりのないような地域と関係を結ぶ努力をしていることが改めて確認された。

「諸芸術の歴史」に関しては文化省、教育省と行政的に分かれているとはいえルーヴル美術館は積極的に関与している姿勢が見えた。教科書を作成し活用を図る、教員の研修を行うなどである。「諸芸術の歴史」は単に美術ではなく全ての教科で取り組むものであり、美術の教師だけが行えばよいというものではない。そういった意味でもルーヴル美術館の取組は教師にとっても貴重なものと考えられる。

## 6. まとめ

ここまで、4 つの美術館を見てきたわけであるが、それぞれの美術館では当然ながら各館の持つ特徴がある。それは館の設立の目的や経緯、立地条件等様々である。しかし鑑賞教育活動について共通する部分も多くある。

まず、どの館も教育活動を重視し、積極的に取り組んでいることである。設立当初から目的としているボストン美術館やテートだけでなく、グッゲンハイム美術館やさらにはルーヴル美術館でもその姿勢は見る事ができた。しかも単に来館者を増やすためといった目的ではなく、鑑賞教育普及活動を市民に対して行うことで社会に貢献するといった確固たる目的があった。概してアメリカの美術館は市民に対する教育という概念が欧州のものより強く感じられた。芸術作品を教育に役立てるといった面があることが感じられた。グッゲンハイム美術館のような新しいところでも積極的に鑑賞教育に努めている面がよくわかった。テート・モダンも欧州の中では、教育普及に関し先進的な地位を占めていることが今回の調査で確認された。今回特に注目すべきはルーヴル美術館である。ある意味ではもっとも教育普及からは距離を置いてもおかしくない存在と思うがそこでも積極的に、学校との連携や館内でのパフォーマンス、教員向けの講習会など様々な形で教育普及に取り組んでいる姿が見られた。

次に特徴的だったのはどの館も積極的に美術館の外に出て行っていることである。パートナーシップやアウトリーチプログラムを設け学校やそのほかの地域の教育施設と連携を図り活動をより強い、実りあるものとしている。教育普及が単に美術館内で行われるものでなく、学校などに積極的に出て行きそれぞれの関係者が直接話し合いながらよりよい効果を狙っていることがわかった。これは今後もますます盛んになるであろう。我が国でもいくつかの例があるが、ぜひこの流れを作っていきたい。美術館の敷居が高いと感じている学校関係者はまだまだ多い。美術館から学校に出てきてくれれば、さまざまな問題が解決されるであろう。パートナーシップ制度などは公共性、公平性、費用などいくつかの問題があり、難しい面はあるがもっと検討されていいと考える。

次に共通点とは言い難いが注目すべき点としてアーティストの存在が挙げられる。グッゲンハイムやテート・モダンは現代美術を扱っていることもあり、様々な活動でアーティスト

は重要な役を演じていた。ルーヴル美術館でもアーティストと高校生、美術館が一体となって館内の美術作品の前でパフォーマンスをしていた。芸術は本来アーティストがいて初めて成り立つものであり、そのアーティストが積極的に教育に携わることは決しておかしいことではない。美術館と学校とアーティストの関係は我が国でも今後積極的に考えていくべきであろう<sup>15</sup>。

## 7. おわりに

今回の調査において、少なくとも本論でとりあげた4つの美術館では、学校との連携は様々な困難こそ存在するが、着実に行われていることがわかった。また、アウトリーチプログラムなどを含めた鑑賞教育活動では多くの教育的成果を上げていることも知ることができた。

美術館と学校との連携はかなり知名度のある美術館やそれが存在する都市でも困難はあるが、それでも着実に実施されている。これは世界の流れと言ってよいと思われる。我が国でも昨今連携の流れは出てきたが今回の調査によりますますその重要性を思った次第である。今後はアウトリーチプログラムの拡充、アーティストの積極的な参加、美術館での教員向けのワークショップの充実等がいかに行われているかについて美術館だけでなく学校やアーティストも含めて調査を続けていきたい。

1 監督：ジュリエット・セニク，出演：パリ・ベルグソン高校，2006年，フランス，52分。ルーヴル美術館で一年間かけて鑑賞授業を行った高校生達のドキュメンタリー。

2 阿部明日香，「芸術ですべてを語る フランス美術教育の現状」、『芸術新潮』，712号，2009年4月，p.113

3 乾氏は東京学芸大学附属国際中等教育学校教諭（当時），プレイル，福井氏はプロの通訳である。

4 烏賀陽梨沙，「アメリカの美術館教育の理念及び実践の史的展開」、『美術教育学』，25号，2004，p.81

5 VTS (Visual Thinking Strategies) はハウゼンらによってもたらされたもので「美術作品を通して考える能力，コミュニケーション能力そしてヴィジュアルリテラシーを高めるための鑑賞教育のメソッド」上野行一「私の中の自由な美術—鑑賞教育で育む力」光村図書，2011，p.100等参照

6 清水恵美子，「岡倉覚三のボストン美術館中国日本美術部経営—美術館教育を中心に—」、『分化資源学（6）』，p.25,2007,分化資源学会，によると1870年マサチューセッツ州議会において，美術品の保存と展示，美術コレクションの収集と維持，美術教育の提供を目的とした美術館設立の法律通過により誕生した趣旨のことが記述されている。

7 文部科学省，「中学校学習指導要領解説美術編」，2008，p.22「知識を詰め込むものではなく，」p.23「活動が生徒にとって楽しみや喜びでなければならない」とある。

8 前掲，文部科学省，「学習指導要領解説美術編」，p.5

9 Critical Studies in Art Education. 阿部靖子，「美術教育におけるクリティカル・スタディについて」，『上越教育大学研究紀要』，第25巻,第2号，1996，p.428によると「それまでの制作

中心の教科内容にクリティカル・スタディを含んだ、しかも美術館、博物館、アーティストと学校教育を密接にかかわらせることに多大な貢献をしたプロジェクト」と記している。

10 長井理佐, 「対話型鑑賞の再構築」, 『美術教育学』, 美術科教育学会, (30), 2009, p.270

11 山木朝彦, 井上由香, 「テート・ギャラリーが展開する学校連携プロジェクトについてーその運営組織と方法」, 第33回美術科教育学会富山大会口頭発表資料, 2011, 3月27日

12 山木, 井上, 同上

13 *Histoire des arts avec le Louvre*, HATIER

14 前掲, 上野, p.22

15 我が国にも神奈川県教育委員会等で行っているアートを活用した新しい教育活動の構築事業などの例がある。